

長期連載

第9回 ふるさと知内と妻・雅子

これまで誰も  
手掛けなかった  
歌謡界の  
大御所の足跡を  
追うドキュメント！

芸道60周年記念

# 涙と汗とまつりと

## ——北島三郎物語

●ジャーナリスト 黒田伸

(文中写真も筆者)



### 「甲子園まであと一歩」

札幌・円山球場は戦前から北海道の野球の歴史を刻んできた歴史ある球場だ。人口約196万人の都会の中にあつて、球場の周辺には北海道神宮の森と藻岩山の原生林につながる木々が生い茂っている。

7月26日、その円山球場に北島三郎のふるさと「しりうち」の連呼が続いた。知内町立知内高校野球部が、北海道大会で決勝戦に進み、甲子園まで「あと1勝」に迫ったのだった。

知内高校は1993年の選抜大会に町立高校としては全国で初めて出場し、話題を呼んだ。もし夏の甲子園に出場することになれば野球好きの北島三郎が黙っているわけではない。

この日、円山球場の一塁側スタンドには、知内高校の生徒たちや父母、町民ら約300人が

陣取り、ベンチ入りできなかった野球部員やバスで駆け付けた町内の少年野球チームの子どもたちも必死に応援を続けた。決勝の相手となった札幌大谷

高校も初の甲子園出場を狙って部員たちの目の色は変わっていた。先行したのは札幌大谷で知内は3点を追う4回、2死一、二

前で泣きながらチームメイトと抱き合う姿がテレビに映し出された。知内町役場ロビーにある北島三郎ギャラリーで行われたパブリック・ビューイングには30人ほどが集まり、声援を送った。試合が終わると知内高校野球部OBの職員は「知内の名前を全道に広めてくれた」と感謝の言葉を口にしました。

翌27日、選手らを乗せたバスが札幌から知内町役場に到着すると、父母会や町の約100人が拍手で迎え、準優勝の盾を持った主将の高橋匠選手や吉川英昭監督らが胸を張って降り立った。

セレモニで知内町の西山和夫町長は、「準優勝を果たしたことは知内町民にとって名譽なことですし、町ぐるみで応援してきたことの結果だと思います。選手たちはこの結果を誇りに思っしてほしい」と称えた。



▲知内町役場前で南大会準優勝の報告をする知内ナイン(7月27日)

7回で降板を申し出た坂本は「投げ続けてもチームのためにならない」という思いがあつたからだという。試合後、ベンチ



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を  
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから  
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

**TEL 011-644-0101**

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)